

氏名（本籍）	畑中 美穂（福岡県）				
学位の種類	博士（臨床心理学）				
学位記番号	博甲第58号				
学位授与年月日	平成30年9月29日				
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当				
学位論文題目	幸福感（well-being）を高めるものとしての性の心理的意義 — 性教育および性行動の観点から —				
論文審査委員	主査	東亜大学大学院	教授	村山	正治
	副査	東亜大学大学院	教授	田中	克江
	副査	東亜大学大学院	准教授	上藺	俊和

論文内容の要旨

論文の要旨

■ 第1部 序論

性のもつ意義について益田（新道, 2003）は、「生殖性」、「快楽性」、「連帯性」を挙げており、このうち「生殖性」と「快楽性」は生物学的なものとして動物にもみられるものとしている。一方、「連帯性」は精神性や社会性とも呼ばれるものであり、人の性行動においては多くが生殖とは関係のない行為であることから、コミュニケーションや人間関係、連帯感を深めていくものとしての意味合いが強く、「お互いに愛し合い、信頼し合った人間関係の中でより深まる」（新道, 2003）とされる点が特徴的である。人の性は単に種の保存や快楽的な欲求の面においてのみ意味を成すものではなく、また、婚姻関係を通じて性的な結びつきが存在するだけでなく、自尊心や幸福感といった心理面において関連が深いものであることが示唆される。性に関する正しい知識を得、理解を深めることは、人が幸せに生きてい

くために重要な意義を持つものであると考える。

第1部では、まず性に関する知識を得る場として、性教育を生涯学習の一環としてとらえた場合の、学校教育や家庭における現状および成人に対する性教育の現状について、人の各ライフステージにおける問題も考慮し研究背景として提示した。次に人の性行動の特徴である「連帯性」について、個人の発達段階および家族関係発達段階の視点を含めて論じ、夫婦関係構築プロセスにおける性行動に関連する問題を挙げた。また幸福感（well-being）に関係する事項を挙げた。

人の性の、人に特有の意義である連帯性はどのように生まれ、心理面にどのような意義をもたらすのか。このことを明らかにすることは、性をどのように理解することが、人が幸せに生きていくことにつながるかを考えていく上での一助となるのではないかと考える。本研究では性教育および性行動の観点から、人の幸福感（well-being）を高めるものとしての性の意義について明らかにすることを目的とする。なお本研究では、性の特徴が最も顕著に現れる生殖期を中心に、性・生殖機能の成熟開始である第二次性徴の時期から衰退の時期である更年期までが心理面においても変化の大きい時期であるため、思春期・性成熟期・中年期のライフステージについて論じた。

■第2部 自己を肯定する気持ちを育む機会として捉える性教育

第2部では、性教育を知識の伝達だけではなく自己を肯定する気持ちを育む機会として捉え、生涯学習の観点から学校（研究1）、家庭（研究2）、妊娠期の夫婦に対する両親学級（研究3）を採り上げ、心理的アプローチによる保健指導の実践と課題について論じた。

◇第1章 研究1

臨床心理学的な視点を統合させた性教育の方法の開発の試み

第1章では、学校教育の場において助産師であり臨床心理学修士である筆者が行ってきた性教育の特徴として『働きかけや態度の10原則』を挙げ、実践事例を基に論じた。この働きかけは、「性教育に臨床心理学的なアプローチを統合させることにより、心身両面についての自己像に肯定的な心理的变化をもたらせられるのではないか」という基本仮説に基づいており、現代の心理療法の有効な理論に照らして

、Rogers.C.R.によるPerson Centered Approachの理論に通ずるものとして納得のいくものであることが示された。

◇第2章 研究2

母親が受けた性教育経験の差異に着目した子への性知識伝達行動の比較

第2章では、家庭での性教育の担い手としての親への啓発教育に関する知見を得ることを目的として、母親が子どもの頃に受けた性教育の経験と子への性に関する知識の伝達行動の関連について調査した。その結果、性教育を受けた者は子に対する知識の伝達行動ができている者が多く、受けていない者はできていない者が多いことから、母親の性教育経験が子への性知識の伝達行動に影響を及ぼすことが明らかになった。また学校および親から受けた性教育の双方とも、具体的な知識内容に月経に関する内容が多く見られたことは、調査対象者が母親であることに鑑みても性教育の内容が不十分であることが窺えた。殊に、性に関する知識を科学として扱う視点が乏しいことや、男子に対しての性教育が疎かになっている可能性が推察された。啓発教育では、まずは親自身が「性教育の担い手である」という認識ができ、自信に結びつく自己効力感の育みの機会であるという認識の下、①性を科学として捉える視点、②子の成長に合わせた「親だからできる性教育」の視点、③家庭の機能としての性教育の充実について内容に含め、親にとっての性教育の機会ともなることを目指すことが必要である。

◇第3章 研究3

夫婦の内的成長を目指したアプローチによる妊娠期保健指導の検討

第3章では、妊娠期の夫婦が子の誕生によって変化する関係に順調に適応できることの重要性から、双方が内的に変化し成長することを目指した両親学級について検討した。育児・家族計画・夫婦関係に関する内容の講演を行い、指導内容の受けとめについて感想文を分析した結果、出産後の具体的なイメージを描けるような指導内容は実際に起こり得ることの理解を助け、出産や育児についての前向きな受けとめ方ができるようになった。また一般に偏重しがちな妻へのサポートの必要性だけでなく、夫についても、心理面を代弁する等により理解が必要であることが認

識された。指導者としての夫への支援の視点を明確にすることによって夫婦双方が夫や父親の役割を描きやすくなり、子の出産を契機として大きく変化する夫婦の関係について理解し、パートナーに対する「思いやり」の気持ちが育まれていた。両親学級は夫婦が揃って保健指導を受ける機会であるという特徴を踏まえ、単に知識や技術の習得に留まらない心理面への働きかけを重視した指導を積極的に行っていくことが重要である。

■第3部 個人の心理面における性行動の意味

◇研究4

夫婦関係構築プロセスが性行動に及ぼす影響とその心理的意義

— 一 中年期男性の事例から —

第3部では、研究4において、中年期の夫婦の関係構築プロセスから夫婦の性行動に影響を及ぼすものを探り、性行動が個人の心理面においてどのような意義を持つのかを検討することを目的とした。方法は、1名の中年期男性を対象にインタビューを行い、TEM (Trajectory Equifinality Model: 複線径路・等至性モデル) の手法を用いて分析した。その結果、性行動には危機の乗り越えや共通のライフイベントを通じた共有する思いが影響することがわかった。また本事例は妻に対する尊敬の念を持っており、妻との関係を良好に保ちたいという思いが心理的な変容につながり、妻への愛おしみを感じられる性行動を行い得るに至った。夫婦の良好な関係は性行動を継続して行い得ることにつながり、また性行動を継続して行い得ることで夫婦の関係が良好に育まれることが示唆された。また、妻への愛情が性における連帯性を育み、性行動が個人の心理的な発達を促進するという意義のあることが示唆された。

■第4部 総合考察

第4部では、まず、心理的アプローチを用いた性教育における自己を肯定する気持ちの育みの可能性について考察した。性教育は性に関する知識を得る機会であると同時に自らの身体が題材であることから自己の重要性を認識しやすく、肯定的な気持ちを育む機会として有利性があると考えられる。本来、自分の体を大切なものだと

認識できる肯定感覚は幼い頃から育まれることが望ましく、このことがひいては第二次性徴による心身の変化に対応する力とも結びつくことが推測される。しかし成人が必ずしも性知識が十分であり自己肯定の気持ちを持っているとは言い難く、成人に対する性教育の充実が望まれる。『働きかけや態度の10原則』によるアプローチは対象が成人であっても応用できる可能性があり、さらにこのアプローチのスキルを身につけることが家庭における性教育や夫婦関係構築に役立つ可能性があることが考察できた。

次に、心理的成熟を伴うことで深まる性の連帯性と『幸福としての性』について考察した。研究4の事例では性行動を通じた連帯性の育みについて論じた。重要な他者からの“愛を受け得る私”の実感は自己肯定の気持ちに結びつくと考えられ、良好な人間関係構築が重要である。また連帯性の基礎となるのは乳幼児期からの親子関係における親密性が重要であることが諸説により指摘されている。特に肌を通じた接触が体の感覚を通じて心地よさや安心感、相手への信頼感といった心理的な充足感をもたらすことから、性行動を通じた親密性の中で自己肯定の気持ちを育むことは心理的な成熟を促し、人らしく生きることとしての幸福感（well-being）を得られる重要な機会であるといえよう。人が生涯を通じて『幸福としての性』を求める存在であることは、生涯発達の視点からも重要である。

■ 第5部 結論

本研究では、生涯教育の観点で性教育を捉え、心理学的理論に基づいたアプローチが自己像に肯定的な気持ちの育みをもたらす可能性が示された。また夫婦の性行動では良好な関係構築や個人の心理的な成熟の過程で親密性が育まれ、連帯性を深める性行動に結びつくことが示唆された。自己を肯定する気持ちは性の健康を高め、個人のみならず重要な他者にも影響を及ぼし、幸福感（well-being）を高めることにつながると考えられる。

以上の観点から、人の幸福感（well-being）を高めるものとしての性の意義が明らかとなった。

論文審査の結果の要旨

本論文は5部構成である。序論、2部、3部、4部、結論である。A4、87頁である。

第1部序論では、問題提起がなされている。即ち、従来の性教育は“学校における性教育”だけが注目されてきている。しかし本論文では、「生涯学習の観点」から、学校、家庭、妊娠期、中年期などの人間の成長の発達過程に応じた教育の必要性を強調し、かつ、各期における性教育の方法の開発と意義、その実践研究を行った点が極めて新しい点である。

第2部から第3部までがその研究と成果が記載されている。

第2部 第1章 研究1が本研究の最も重要かつオリジナルな視点と実践が詳細に記述されている。特に、従来の性教育が知識の伝達だけにウエイトをかけてきているが、研究者本人は、臨床心理学的視点と助産学の視点を統合した、新しい性教育のプログラムを作成し、このプログラムを多数回、学校で実施した。プログラムの核心は、「働きかけや態度の10原則」であり、自己肯定感の育成を目指した。本研究はこの論文の中で最も密度が高く、独創性の高い研究である。感想文などの事例報告によって、このプログラムと指導法は確実に成果をあげていることを例証している。今後は、数量的研究ができる段階にきている。

第2章 研究2は、家庭における性教育の担い手である親の性教育意識を小・中学生の子のいる335名の母親にしたアンケート調査である。調査内容は、学校で性教育を受けたか、親と話したか、子と話したか、初経・精通時の対応など4点を中心に行っている。またアンケートをKJ法により質的分析を行った。結果も詳細に報告されている。注目すべき事実も多数見つかっている。「学校で性教育を受けたことがない」が32.4%、「親と話したことがない」が80.2%など、性教育の必要性、かつ、両親教育の充実ならびに「親でもできる性教育」の提案も斬新である。

第3章 研究3は、妊娠期保健指導を実施した。夫婦309組、617名が参加している。自由記述方式アンケートを行い、その効果を確認している。またKJ法による質的分析も行っている。注目すべき点は、①「赤ちゃんの24時間時計」の創作、出産経験者の実体験に基づいたムービーの作成など、研究者本人の様々な優れた工夫にさすがと驚かされる。また、②「赤ちゃんは一人の独立した存在である」こと、③夫婦の主眼的取り組みの重要性が抽出されていることに注目したい。結果として、①個別性の理解、②「出産が楽しみになった」、③夫への支援、夫婦の関係性の重要性が確認できたなどである。この結果は、研究4につながってくる。

第3部 研究4は、研究2、3で、家庭における性教育には夫婦、特に夫の参加が必要であるとするデータが得られている。研究1、2、3の研究を通じて研究者のネットワークが生まれ、貴重な50歳代後半の協力者が得られることになったのである。研究デザインをはじめ、倫理的配慮、方法の選択など慎重な検討が行われたことが記述されている。面接協力者の全面的な支持が得られている。方法としてはTEM法を採用し、一事例の面接とその

詳細な分析を行っている。夫婦関係構築のプロセスでは、「Ⅰ；核となる家族の形成期」、「Ⅱ；社会的な要因の影響」、「Ⅲ；新たな家族関係を夫婦が中心になり構築する」の、3段階の展開が確認できた。これはある意味では理想的なモデルとしての発展過程とも言えよう。性行動は、夫婦関係の信頼関係、妻への尊敬の念が基盤としている点が示唆された。性行動についての聴取という困難なテーマに取り組んだ研究者本人の高度なセラピスト性がうかがえる。

第4部 総合考察と第5部 結論は、研究1, 2, 3, 4のまとめである。性教育の重要性の確認と、今後の研究方向が示されている。性教育にwell-beingの視点が重要であることが示唆された。

本論文の成果と評価

- ①本研究の独自性は、助産師歴30年に加え、PCAを中心とする臨床心理学的理論を統合した新しい性教育の基本的な視点と、具体的なプログラムを創造したことである。参加者の主体性を重要視した点が特色である。
- ②生涯発達の視点からの性教育の実践として、子どもや、妊娠期の夫婦を対象とした保健指導の具体的プログラムを作成し、実践して参加者からの高い評価を得た。
- ③招待授業の体験から、性教育の新しい方法として「働きかけや態度の10原則」を研究者本人が実践から生み出したことは高く評価できる。
- ④社会的意義としては、混乱する日本の性教育に臨床心理学と助産学を統合した新しいプログラムの開発は高く評価できる。日本の学校教育、保健指導、夫婦に対する性教育などの道を拓く画期的な研究である。今後の社会的な展開が楽しめる有望な研究成果である。

公聴会の結果

本論文の公聴会は、平成30年6月19日にわたり、2号館2607A教室で実施された。論文提出者の発表後、審査員によるコメント、質疑、助言が行われた。これに対して、論文提供者から適切な説明が行われ、質問への回答も納得のいくものであった。新しい性教育のプログラム開発と実践研究が高く評価された。

以上、本委員会は、本論文が博士（臨床心理学）の学位を授与するに値するものと認める。

以 上